もしも　わたしたちの東雲附小が　火事になったとしたら

― めあて意識の持続を図る資料活用の工夫 ―

富　村　　誠

1．東雲附小を火事にしてしまったわけ

何とも物騒千万な単元名である。教科書教材では一様に「火事（災）を防ぐ」と名付けられている第４学年の内容（１）イにかかわる学習を，物騒千万な想定ですすめたわけは，次の二点である。

―子どもたちの火事に関する実態調査結果から―

㋐　これまでに，火事にあったことがありますか。

複式８名の子ども全員が「ない」という答えである。テレビ・新聞など報道を通してならば，全員が経験を持っている。しかも，現場写真はよく見るという子どもが，ほとんどである。

㋑　火事とは，どんなものだと思いますか。

火事とは，家や山が焼け，時には生命が失われるものだというように，単なる知的な理解として答えているものが多い。大変に恐ろしいものだとか，起きてはいけないものだというような実感的な受けとめ方はしていない。㋐の実態からして，当然の反応であろう。

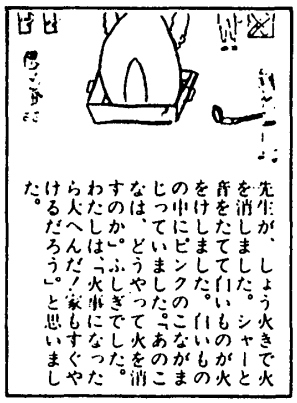
このような実態の子どもたちとともに学習をすすめる場合，「広島市民を火事から守るため，どのようなくふうやしくみがあるのでしょう。」などという問いかけは禁物であることは言うまでもない。話・テレビ・本などで知的な情報や知識を数多く持っている子どもだけが得意になって発言し，何となくわかったつもりになってしまうように思えるからである。また，そこには，子ども自らが，めあてを持ち，自分自身の問題として追求し解決していく何物もない。くふうやしくみを知っている子は発言する・知らない子は『知るため』に調べる，というのでは意味をなさない。

そこで，火事の恐ろしさを子どもたちに実感させること・火事が起きてはいけない場所として自宅の次に挙がるであろう学校（塾というのが当世風なのか）を具体的な事例とすること，を構想してみたわけである。

―子どもたちの火事（避難訓練）に対する意識の持ち方から―

- 中高学年児童になると，ものごとを仮定（想定）した考え方ができるようになっている。

「もし，本当の火事になったら大変である。」「ぬきうちの訓練をやってみる。」「もし，そうなったら，どうなるであろうか。」といった仮説によって事象を推理しようとする感想が出ている。課題解決的な学習の過程では，解決のための予想を持つことが大切であるが，そのような学習の過程を強く意識化出来るのが，やはり中高学年になった時期といえる。――引用　『子どもと社会事象との出合い』・大脊戸　若光　教諭の論考，「初等教育」　33号　　昭和61年３月――



三年生Ｃ子

五年生Ｅ子

具体的な事例として学校を取り上げ，「もしも東雲附小が火事になったら」と問いかけても，知らない・わからない・どうでもよい，との反応しかないようなら笑い話にもならない。その点，仮定（想定）した考え方は中高学年から，という上載の知見をもとに構想してみたわけでもある。

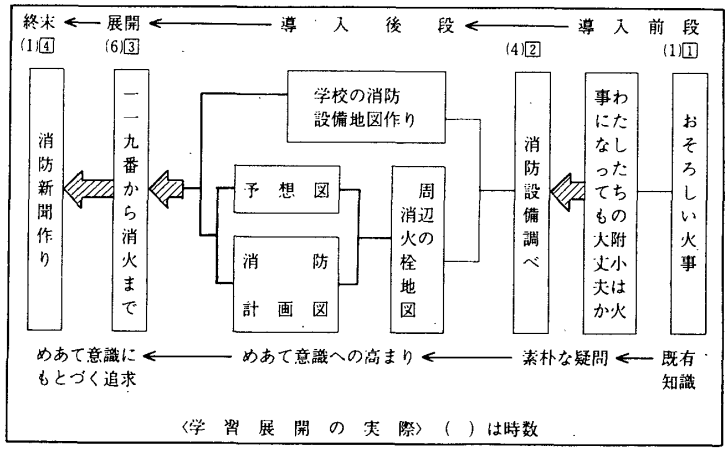
2.「追求する場」をどのように構成したか

一口に，「追求する」と言っても，その場は様々にある。細かく見れば，40分授業の中にも追求の場があるし，単元の導入・展開・終末それぞれにもあるし，展開そのものを追求とする考えもある。要は，〈子どもが，調べる・考えるといった行動をとる〉場をどう構成するのか，ということである。

東雲附小が火事になったらとの想定をもとに，子どもの追求力を育てるよう工夫した本実践事例では，右のように「追求する場」を，

- 追求Ⅰ　素朴な疑問をめあて意識に高める場――導入後段部――
- 追求Ⅱ　めあて意識に基づき問題を解決する場――展開部――

に位置づけてみた。



子どもが社会的事実や事象と対面し，自然に発する問いかけを，〈素朴な疑問〉と呼ぶことにする。知的好奇心や興味と言い表されているような，情緒的な反応であり，驚き（知らなかった・これはひどいなど）や不安（大丈夫なのだろうか・いやだなぁなど），好奇（おもしろそうだ）や疑問（どうなっているのだろう・ふしぎだ）のことである。このような問いかけを単元の導入前段部で引き出し，追求Ⅰの素地づくりにしようとしたわけである。そこで，広島市で一年間に起きた火事による被害・全体での被害を具体的に扱い，その広さ・金額・死傷者数を小学校のそれとの比較でとらえさせていくように構成してみた。この段階をふむことにより，子どもたちに，次の素朴な疑問を持たせることができると考えた。

追求Ⅰの素地となる素朴な疑問

A　火事とは，大変に恐ろしいものだ（驚き）。

B　わたしたちの東雲附小が火事になったら，どうしよう。わたしたちが避難したあと，東雲附小の建物は，大丈夫なのだろうか（不安）。

「もしも，わたしたちの東雲附小が，火事になったとしたら」との素朴な疑問を追求する場を，導入後段部に設け，学校内外の防火施設・設備を調べる活動をすすめていく。七種百四十箇所あまりもの設備が校内にある事実に対し，子どもたちの不安は解消し，大丈夫だと安心するものと考える。さらに，火事の際は七台の消防自動車も駆けつけて来ることを補足し，「もう心配ない」との受けとめに誘っていく。

次に，「まっ先に駆けつけて来る七台の消防自動車は，どこの消防署から，どこにとまるのか。自分が消防士だったら，どうするか。」と問いかけ，配置予想図にまとめさせておく。子どもの多くは，近くの消防署から出動させ，学校近くにとめるものと予測できる。このような追求の場を構成した後，差異の大きい実際の消防計画図を示すことで，次のめあて意識に高められると考えた。

追求Ⅰの後に期待するめあて意識

◦　消防署の人たちは，どのような考えで，消防自動車をこのようにとめるのだろう。そのわけは，――じゃないかな。調べてみよう。

このめあて意識をもとに，子どもたち自らの問題を調べる場を追求Ⅱとして構成する。その際，導入前・後段で利用した資料をもとに無理なく考えられるよう，資料活用の工夫を図ることとした。

3．実践事例「もしも　わたしたちの東雲附小が　火事になったとしたら」の実際

学習のねらい

広島市民を火災から守るため，消防署や警察署・病院などの諸機関が組織的に連絡をとり合い，消火施設を使って一秒でも早く火を消しとめるよう工夫していることを理解する。

(1)　追求の素地となる素朴な疑問を引き出す場〈追求Ⅰ〉

わたしたちの市でおきた火事（広島市消防局）

- 火事の回数
  一年間に　445回……一日に，一回はおきていることになります。
- 火事でなくなった人の数
  一年間に　10人……複中４年より２人多い。
- 火事でけがをした人の数
  一年間に　52人……複低・複中・複高をあわせた人数くらいです。
- 火事のひがい額（もえてしまったものをお金になおした金額）
  一年間に　約８億円……ピアノが約800台買えます。
- 火事でもえた広さ
  一年間に　8844㎡……東雲小学校を12階だてにした広さと同じくらいです。

全国では

- ５万9740回
  一日に164回
  一時間に７回
- 1828人
  一日に　５人
- 7407人
  一日に　20人
- 1506億円
  一日に　４億円
  （消防庁）

昭和58年の記録

学校放送「わたしたちのくらし」から，火事現場を編集したＶＴＲ資料を視聴させた後，左のプリント資料をもとに学習をすすめた。

一項目ずつ，数値を一日あたりに換算したり，東雲小学校の人数・備品・広さと比較しながら読みとらせていったわけである。

「広島市じゅうでもえた広さは，小学校の十二階分です。ということは，一ヵ月に一階ずつが灰になることになります。」（Ａに関するもの）という感想が多く寄せられた。最初の方では，「わぁー」とか「すごい」と発言していた子どもたちも，被害の大きさに口数が少なくなってきた。

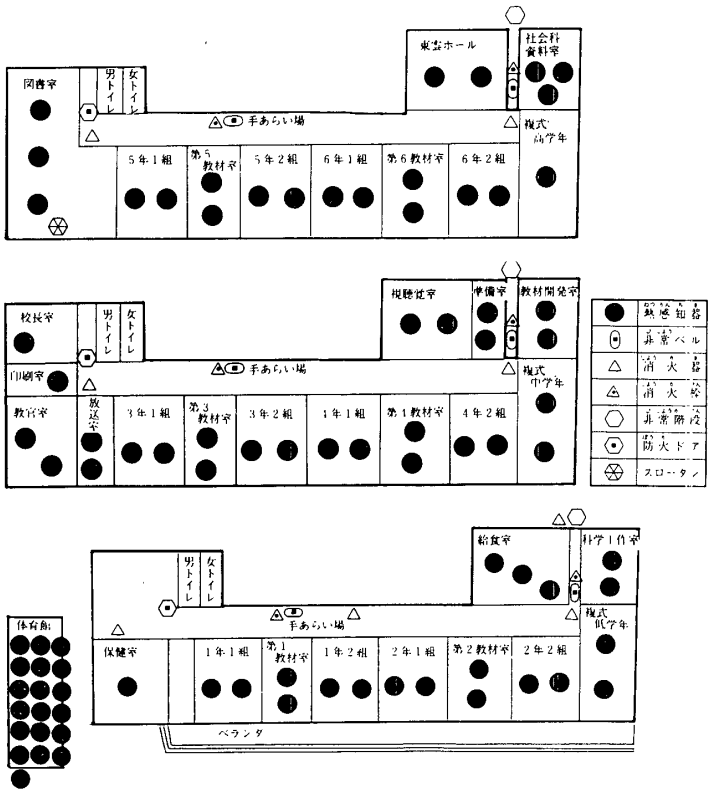
そこで，Ｂに向けての発問をおこなってみた。「もし，東雲附小か火事になったら，お手あげなのだろうか。」である。子どもたちは，㋐消火器・㋑消火栓・㋒非常ベル，の三設備を挙げ大丈夫（７名）　わからない（１名）との反応であった。

(2)　素朴な疑問を追求し，めあて意識に高める場〈追求Ⅰ〉

わからないと答えた子どもの理由は，「自分たちは避難するから大丈夫なのだけれども，学校には誰もいなくなるので，もえてしまうのではないか。先生も自分たちと一緒に避難してしまうので，消火器などがあっても，お手あげだろう。でも，そうしたら消火器などは，誰が使うのか」（発言の要旨）であった。

もっともな考えと言える。実際，避難訓練のときは，校内が空きになるのである。そして，初期消火の計画や訓練は，子どもの目にふれない事柄であったのである。

そこで，消火の作業分担が定められていること・㋓非常階段・㋔スローダン・㋕防火ドア・㋖熱感知器の設備もあることを補足説明し，本当に大丈夫なのかを調査する活動を設けたわけである。その調査をまとめたものが，右の地図である。



この調査活動を通して，子どもたちが持った感想や気づきは，次の通りである。

◦ 東雲附小には，多くの消防設備がある。	(8)
◦ 火事を見つけて知らせるものが多い。	(5)
• 火を使うことが多い給食室に，熱感知器が三つしかないのは，どうしてなのか。	(5)
• 火を使うことの少ない体育館に，熱感知器がたくさんあるのは，どうしてなのか。	(5)
◦ これ以外に，火事のとき役立つものはあるのか。	(3)
◦ 先生や事務の方たちが，消火のため，消火器や消火栓を使って，がんばっている。	(2)
◦ すぐに消防署にも電話するのか。	(2)
◦ もし消せなかったら，そのあとは，どうなるのか。	(2)

——記述をもとに分類・整理したもの。　(　)は人数——

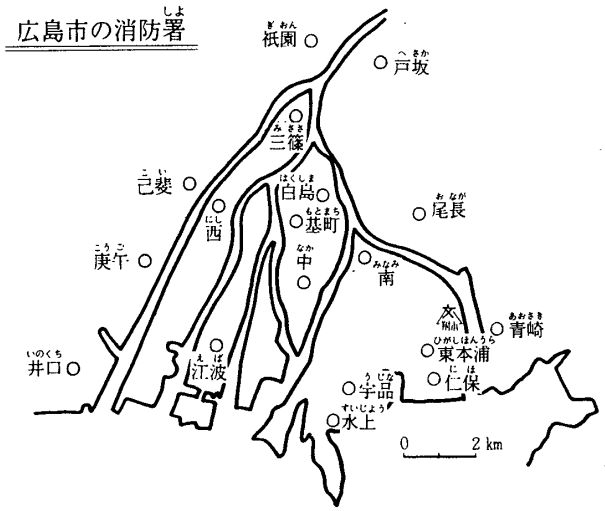
子どもたちの反応を見ると，大丈夫だと安心するよりも，設備の多さに感服しながら他の設備に目を向け始めている。このことは，「もしも東雲附小が火事になったら」との素朴な疑問が，子どもの追求意欲を促す上で，効果的であったことを示している。

子どもたちに，消防自動車が駆けつけて来ること・火事の時に役立つものには校外の消火栓があることの二点を補足説明し，「もし消せなかったら，そのあとは，どうなるのか」は，次時に考えていくことにした。その際，給食室と体育館にある熱感知器に対する疑問（•）は，その不思議さを確認し合う程度にとどめておいた。熱の量や感知器の精度，広さ・高さとの関係など，複雑なわけを含むだけに，めあて意識が高まった段階（追求Ⅱ）で扱うことにしたためである。

①消防自動車の配置予想図づくり

学校周辺の消火栓を示した地図と広島市の消防署の位置および消防自動車の台数を示した地図（下図）を，火事の時に役立つものとして提示することから学習をすすめた。

消火栓の写真をもとに，所在地や学校との距離・消火栓のしくみを簡単に説明し，次の発問と指示をした。



「東雲附小が火事になったら，みなさんが気づいていたように，すぐに消防署へ電話するのです。すると，ポンプ車六台とはしご車一台が，東雲附小めざして走って来ます。」

指示１　ポンプ車六台とはしご車一台は，広島市のどの消防署から来るのか。

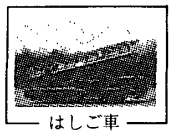
指示２　来ると思う消防署の○に，色をぬりなさい。

指示３　その消防署から，どの車が何台来るのか。表に数字を書きなさい。

「さあ，七台の消防車がやって来ました。どこにとまって，どのようにホースをのばすのでしょう。また，はしごはどこにかけるのでしょうか。」

指示４　消防車のシール（■⊡）を，とまる場所にはり，ホース（→）はしご（▥）を書きなさい。

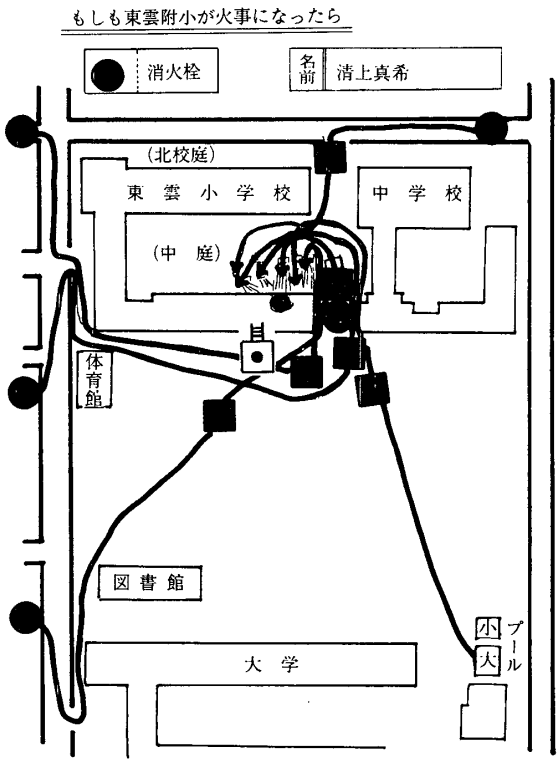
ポンプ車

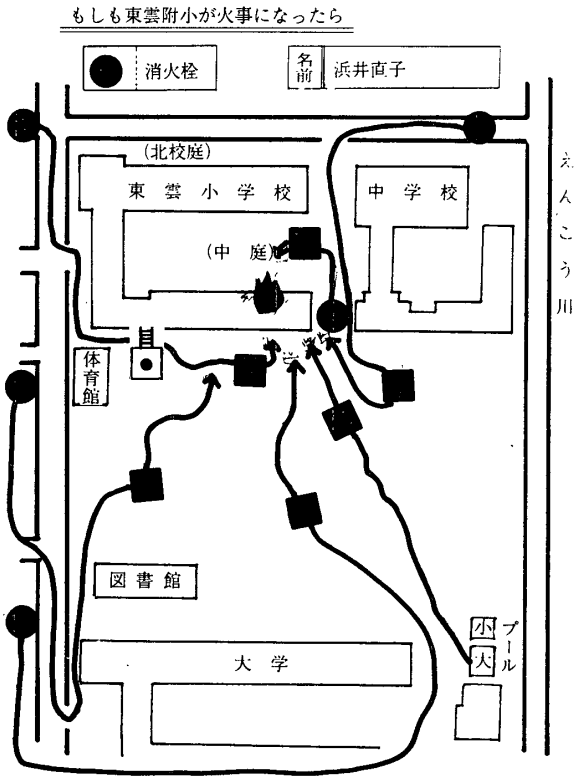

はしご車

消防署にあるポンプ車・はしご車の数
（昭和60年３月31日）

消防署	ポンプ車	はしご車	消防署	ポンプ車	はしご車
東本浦	2	•	尾長	2	1
仁保	2	•	戸坂	2	•
宇品	2	•	江波	1	1
水上	2	•	西	2	1
南	3	1	三篠	2	•
青崎	1	•	祇園	2	1
中	2	1	己斐	2	•
基町	1	1	庚午	2	•
白島	1	•	井口	2	•

「もし消せなかったら，そのあとは，どうなるのか」との追求意欲に支えられての活動だけに，各自，早く消すための工夫を考えて記入していった。下は，その二例である。



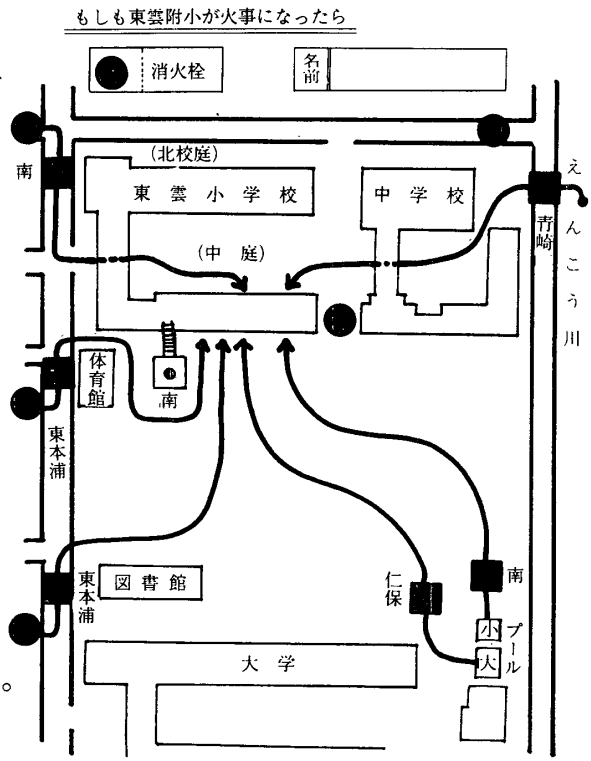


消火栓を五つとも使う・大プールを使う・火元が見やすいようにポンプ車を校舎の近くにとめる子どもが多かった。また，出動する消防署は，東本浦・仁保（各ポンプ車二台），青崎・宇品（各ポンプ車一台），南（はしご車一台）との予想がほとんどであった。

②実際の消防計画図と比較する。

子ども一人ひとりが，各自の予想図を発表し合った後，実際の消防計画図（広島市南消防が第一出動時のものを想定して作成したもの）を提示し，比較する活動を設けてみた。

- 消火栓は三つしか使わない。
- 校舎近くの消火栓が二つも使ってない。
- 小プールと川の水を使っている。
- ポンプ車は校舎の遠くにとまっている。
- はしご車しか来ないと思っていた南消防から，ポンプ車も二台来ている。
- 二台来ると予想していた仁保署からは一台しか来ていない。



このような，差異の大きさを読みとりながらとまどう発言が目立ってきた段階で，わからないことをカードに書くよう指示したわけである。

子どもたちは，四十二枚ものカードに，さまざまな新たな疑問を書きあげていった。その内容を分類・整理すると，次の通りである。

A　プールについて
◎小プールの水をなぜ使うのか。すぐなくなるのでは。　(4)←--- b
◎冬に，プールの水がない時には，どうするのか。　(4)←--- a
B　えんこう川について
◎川の水は，よごれているのに，使うのか。　(4)←--- a
◎川の水が引いている時には，どうするのか。　(4)←--- b
C　消火栓について
◎学校の近くにある消火栓を，なぜ使わないのか。　(8)←--- b
D　消防自動車の位置について
◎火事の現場から離れているのは，どうしてか。　(5)←--- b
◎どうして運動場の方から水をかけるのか。　(2)←--- a
◎消防自動車のホースは，どのくらいの長さなのか。　(2)←--- a
○道路にとまっていて，じゃまにならないのか。　(1)←--- c
E　消防署について
○近くの仁保から，一台しか来ないのは，どうしてか。　(1)←--- c
○なぜ，東本浦や仁保には，はしご車がいないのか。　(1)←--- c
◎消防署から東雲附小まで，何分かかるのか。　(1)←--- a
F　消防計画について
○この計画でも消せなかったら，どうするのか。　(1)←--- b
――（　）は人数――

(3)　問題を解決する場〈追求Ⅱ〉

子どもたちの新たな疑問が全て，追求すべき問題になるのではない。

ⓐ追求の素地となる，知らせるべき事項

ⓑ「もしも東雲附小が火事になったら」という意識の中で考えさせるべき事項

ⓒ発展的な問題として扱うべき事項

に分け，順に解決する場を設けていくことにした。

以下，ⓑの実際について述べる。子どもたちにしっかり考えさせたい問題として，「一秒でも早く火を消しとめるよう工夫していること」(◎)にかかわる四つ・「諸機関が組織的に連絡をとりあっている」(○)ことにかかわる一つに焦点化していったわけである。

学習では，消防自動車のミニカーを用い，模擬的に出動し，その位置に配置する操作活動を通すことで追求を促していった。子どもの反応は次の四点である。

- 川の水を使うのは，青崎からやって来て最初に出会う水だからだろう。
- 小プールの水は，ホースを入れやすいので，使うのか？
- 川の水が引いている時のために，消火栓が使わないままになっている。
- やって来る消防署から近い水のところにとまって，ホースをのばしている。

4．実践をふりかえって

本実践事例では，めあてを追求する場を，「素朴な疑問をめあて意識に高める」「めあて意識に基づき問題を解決する」に分け，それぞれの資料活用の工夫点を明らかにしようとした。

子どもたちにとって親和性のある学校が火事になった場合を想定したことで，めあて意識が高められ，問題解決が子どもたちなりに果たされたことは，一応の成果があったものと考える。また，身近な事例をもとに教材化し，資料を整備すれば，見学・調査を組まなくても学習のねらいは達成されることも明らかになったと言えよう。高学年への発展を見通しながら，今後とも，子どもの実態に即した教材の開発・資料の活用に努めていきたい。